

可認物便郵種三第省信遞日六十二月二十年一十三治明
行發日五十一月一二月每 行發日一月一十年五十三治明



政教時報

第九號

論說

學生間に於ける信仰の勃興

(社説)

天の道人の道

藤井健治郎

社會

◎佛教各宗派を戒む◎佛教家の海外行◎新聞紙の品格

獨逸皇帝の演説

(海外時事)

雜錄

死の實際的研究

安藤正純

▲旅より▼

視察

摸範的安泊「故郷の宿」

池山榮吉

▲閑文▼

信界

佛弟子小傳

近角常観

▲報道一頁▼

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念の確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して善真なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

政 教 時 報

學生間に於ける
信仰の勃興

近時學生の間に信仰を求め、宗教を得むとするの氣風が勃興し來りたる事は頗る著しき様に考へらる。吾人は此に對して非常なる希望を以て眺めつゝあるものである、而かも其提起せらるゝ問題、道を求むる精神なるものが從來の如く、試みに坐禪をするとか、面白半分に講義を聴くとか、哲學が高尚だとか文學が清新であるとか云へる如き、宗教の形式より來りたるものでなく、猶一層眞摯なる態度を以て、根本的に宗教の精神を體せんとするものである、甚しきに至りては本人自身は宗教を求めつゝあることを自覺せずして苦悶しつゝあるものすらある。

抑々宗教問題は人生問題の最後の解決である、故に眞面目に此人生の如何なるものであるかを考ふるものならば、必ず宗教の精神、信仰の樞機に達せずには止まぬものである。近頃青年學生間にありて多少眞面目なる人は何れも何んとか人生觀を定めんと欲して苦心しつゝあるものが多い。勿論中には随分思ひ切りて宗教と反對の方向に趨つた考もある、然れ

ども人生と云へる大問題に手が達して居るだけ、確かに形式的に宗教を弄するよりも、より多く宗教的である。ニツチエの如き人生觀は固より宗教の眼よりみれば邪まなる道に陥りて居る、されど人間の弱點を看破して、非常なる苦悶の聲を發したるものである。若し個人と社會とは同一なる生活の行路を辿るものとすれば、ニツチエの如きは宗教を求むる時代精神を代表する飢渴を訴ふるの聲と見做すことが出来る、これは宗教に最も遠き思想でも人生問題を解釋せんとする活ける實感を顯はしたる聲は宗教及精神に近いと云ふ一例を挙げたまでである。とにかく現代學生の頭腦を苦しめつゝある問題は理論や教理の如き宗教の形骸にあらずして、人生の根本義、精神上的の安慰と云ふ如き充實せる問題である。又道徳上の問題の如きも單に其原理の説明にあらずして、實行上力強き動機を得むとすることである。其甚しきに至りては苦悶の極學問、夫れ自身に於て何等の目的をも見出すことあたはず、人生其物の意義をも發見することあたはずして、失望落膽の淵に沈まむとする如き眞摯なる態度に出づる人の如き少からぬことを實見しつゝある次第である。

門は叩けば開かれ響へらる、鐘は撞くを待ちて聲を發す、求めずして得らるべき筈もなく、通常の生活に尋常なる態度であつて信仰の來るべき筈はない。釋尊が城門を出て、老人、病人、死人の如何に苦むべきか悲しむべきかを目撃して、人

生問題の解決に苦しみ煩悶の極域を遁れられたるが如き、最も宗教的實驗の模範として偉大なる感想を吾人に與へらるゝ次第である。又ルーテルがエルフルト大學に在るの日、アウグスターネル、修道院に遁れて其一室に籠りて苦悶に沈みたるも、クロンウエルが非常なる憂鬱病にかゝりて苦痛に堪へず、半夜屢々醫の助けを呼びたるも皆人生問題の解決に苦みたる實驗である。吾人は、此種の求道精神の傾向はたしかに青年學生の間に潜伏しつつあることを確信する次第である。

此の如く求道の精神の熾んなる學生が如何にして満足安心の地位に達すべきかは直ちに解決を要する問題である。吾人は必しも釋尊の如く家を捨てざるべからず、ルーテルの如く學校を遁れざるべからずとは論ぜず、勿論釋尊の如き、ルーテルの如き苦悶の極安坐するに忍びずして此の如きことが出来たもので、特にかく爲さむと企て、爲した譯ではないのである。故に眞摯に道を求むる精神にあらば寧ろ學問と平行しつつ信仰の確立を謀ることが最も適當であると考へる。勿論人によりては前に記せる如き苦悶に陥る事はあるが、又苦悶せざる可からずと考ふるも頗る不自然である、要は健全なる方法を以て宗教を味ふことが必要である。

然らば如何にして宗教を味ふべきかと云ふに、吾人は眞摯なる精神的談話會を催ふして、各自の實驗を語り、信仰を被

謀り、遂にゼスイットの組織となり、サヒエーの東洋傳道となつた。其結果が天草の亂である、又ゼスイット主義の大成功は今日モンマートル山上の舊跡に天に響ゆる大伽藍の新築せられつつあるにても明瞭である。又ジョン、ウエスレーは牛津大學に在るの日、弟のチャールズ、及びモルガン、ギルクハムの三人と共に夜會を催ふし、希臘語の新約全書を輪讀し、隙ある時は監獄を見舞ひ、貧民を慰める等のことをした、是がメンチスト運動の起源である。看よ學生時代に於ける敬虔なる信仰と熱心なる實行が如何に大なる結果を社會に残したかを。

吾人は青年學生にして道を求むるの士に警告する、諸君の任務は決して小なるものでない。諸君にして先づ苦しむ所以のものは先づ覺るべき使命を負ふて居るのである。諸君の求めむとする所は乃ち社會が得むと欲して居る所である。予は斷言する、現時學生間に於ける熱心なる求道の精神の勃興せる所以のものは、たしかに現時の社會上に於て大なる意味の存することであると確信する。

古來思想の混亂の時代は随分多けれど、現時日本に於ける思想界ほど混亂せるはなかるべく、古來不眞面目なる社會は決して少くはないが、我國今日の社會ほど不眞面目なる社會はなからう。近頃新聞紙上にあらはるゝ事實を見ても實に忍

瀝し、宗教の聖典を輪讀し、古聖の教訓を味ひ、殊に其實行の上に於て一々信仰の生命より推し出して、生活上に宗教の意味を實現することが最も適切であると考へる。予は必しも多數相會せざるべからずとは思はず、又深遠なる研究を爲さるべからずとも考へぬ。活ける研究、實踐的の信仰が最も適切であると考へる。即ち直ちに人生夫れ自身の上に於て實驗的に、解決するが最も其所を得たるものと考へる。

古來、宗教的運動の起源か其青年時代、學生時代に始まりたるものが多い。親鸞聖人の如き叡山に在りし時幾多の研究に腦筋を絞らるる後、非常なる求道心に驅られて遂に法然聖人の庵室に安所を發見せられた。當時吉水黒谷の地方は求道者の集會所であつたに違いない。日蓮聖人も叡山修業の當時既に一種の思想を抱き南都地方の旅行を終へ、古郷に歸りて其所信を宣傳した。ルーテルは學生時代に信仰定まりたる後、以太利亞の旅行に於て幾多の感慨を齎らして歸り、ウツテンベルヒの大學に教授たりし時宗教改革の事業を起し、同學の友メラントトン、スブラテン等之を助け、晩年ウツテンベルヒの住家に於て、フリーゲンハーゲン、ヨハナス等と共にバイブルの翻譯を完成した當時の室は今猶依然として舊の如く存在して、旅行者をして感慨措く能はざらしむるものがある。又ロヨラ、は巴里大學に在りたる時サヒエー等の六人の友人と共にモンマートルの山上に於て相誓ひて舊教の恢復を

ひ難き事ばかりである、して之を筆にする新聞紙なるものも畢竟人の嗜好に投じて售ることを求むる爲めである、又世人も腐敗したる話を面白がつて見て居るなど、實に不眞面目の人間ばかりの集合である。宗教界の腐敗は固より言語道斷である、されど之を攻撃する社會が決して他を攻撃出来る資格はない、日本現時の政治家も、實業家も、教育家も學者も眞面目の意味から言へば一も取るべきものはない、勿論權謀に巧みななる政治家はある、權勢に阿諛して龍斷を事とする實業家はある、逢迎主義の學者器械的の教育家はある、して人間はかくして生活し、かくして云爲し、かくして醉生夢死すればよいのであるか、人生は此の如き滑稽なるものであるか、浮薄なるものであるか、人生問題の解決、即ち宗教の振作、信仰の確立はと現時の日本に於て必要なる活問題はなからう。

古風なる漢學的の教育を受けたる人は頑冥ではあるが、一點堅持する節操なるものがある、舊信仰を抱ける人は随分古めかしき形式はあるが、精神上に大安慰を得て居る。然るに現時維新當時より已後の所謂知名の士と稱せらるゝ中老輩の人士ほど不眞面目なる人種は恐くは少からう、法律に觸れざる限りは何事を行ふも可なりと考へ、品性の何物たる人格の何物たる信仰の何物たるをも知らず、宗教と云へば佛事か葬式の事と考へて居る、かく云へば僧侶が夫已外の事をせぬ

非我の差別はない。意志ある人間に至りて始めて生ずるのである。意志は動力中心の自覚を意味する。換言すれば能動の我と所動の非我との差別の自覚を意味する。かくして我、非我の観想は此自覺的精神或は意志を有する人間社會に至りて始めて起つたものである。されば高等なる自覺的精神を有する人間は、必ず此差別界に生存せざるを得ないのである。

意志はそれ自ら立てたる目的を成遂するに於いて、而して唯、そのみに於て自己満足を感じ、而して唯、そのみに於いて、人生の價値を認むるものである。其發するや自主自裁、其動くや不羈獨立、其間秋毫他の干渉を容れぬ處にこそ眞個に自我の満足は得らる。意志がその爲さんと欲する所を爲し、その行はんと欲する所を行ふて何の不可なる所ない。此見點は所謂、本能主義といふのである。かくて此見地より自我さへ満足すれば他人は如何様であつても少しも關する所てなく、他人も社會も國家も、たゞその自己意志満足の手段としてののみ、自我に對して價値を有するもので、社會國家の幸福安寧とは、個人實力の充實のみによつて得らる。一人損して國家損し、一人益して國家益するのである。此の如き見點は之を個人主義といふのである。

此の本能主義、個人主義といふものは、予が所謂主我心の必然の發動に名つけたるもので、實に已むを得ざるもの、否なくて叶はぬものである。若し斯主義が徹つたなら、恐くは

人間歴史の大半は抹殺せらるゝことであらう。世の大なる戦争、大なる經營、大なる發明発見等は實に此本能主義個人主義の賜物といつても決して過言でないのである。淺薄なる教權主義、偏頗なる國家主義等が、粗末に此個人主義、本能主義を壓抑せんとする個體家の思想には全然賛同することは出来ぬ。

然れども意志の發動、自我の満足は決して或る制限をうけずして已む能はざるものである。第一自然の制限をうけねばならぬ。羽なくして鳶の如く天に戻らんと欲し、鰭なくして魚の如く淵に躍らんと欲するは、固より愚の極なる願望であつて、健全なる意志の欲求せざる所である。是れ始より自然の制限上斯の如き願望の空想として終らざるを得ざるを知らばである。このやうなことはむしろこゝで説く必要はない。

第二に意志は時々の休憩を要するのである。不漸の緊張はその斷絶を意味する。吸ふ息あればこそ呼く息はあり、眠りて休息時あればこそ醒めて働く時はあり、排泄の作用ありてこそ攝取の作用は出来るのである。大に活動せんとする意志は大に安靜なる休憩を要するのである。大に飛躍せんとする意志は、大なる勢用の蓄積を要するのである。休むことなき活動の意志は、泉源なき河水の如きものである。

意志が蒙る第三の制限は最も緊要なものである。意志は自

我中心點の形成を意味し、我非我の差別を意味する。されば、一方に我が成立すれば他方にも亦同じやうなる我が成立し、かくして世間には幾億方といふ限なき大数の自我中心點が生ずるのである。此無數の自我中心點は畧々同様な欲求を生起し、而してその欲求や際涯なく、その欲求せらるゝものは限あるが故に、その間に必ず衝突を感じざるを得ない。衝突せる意志は飽まで自我満足を主張して他を儘すか、或は自ら僵れて他我を満足せしむるか、兩者必ずその一に居らざるを得ない。然れども茲處にも強者は勝ち弱者は負くといふ原則は應用せらる。如何に強くも個人の意志は衆多の意志の合力の強きには勝たれない。若し之としも飽迄その力を角せんとせば、自ら滅亡を招くの外致し方ないのである。故に若し眞個に自我を主張せんとすれば、意志は自らその取らんと欲する所爲さんと欲する所を棄て、他人の意志の満足を圖り、團體意志の制限を甘受しなければならぬのである。是れが所謂第三の制限で甚だ肝要なるものである。

かやうに個人意志は團體意志の制限をうけて活動しなければならぬといふと、飽まで自我は積極的の主動者で、團體は、只消極的の制限者のやうに聞ゆるが、之を主客地をかへて言ふ時は全く別様にいふことが出来る。それはこうである。團體意志は個人意志とは全く別物として獨立自存する。そうしてそれは衆多の意志であるが故に個人の意志より必ず強い。

そこで個人意志が團體意志に反抗して自儘の要求を爲す時は、團體意志はその權力によりて個人意志の要求を抛擲するべく餘儀なくするのであると説くのである。そも個人といふものは團體と有有機體の細胞に依りて生れ、團體によりて發育成長し、團體によりて死するのである。四肢の運動も、胃の消化も、心の鼓動も肺の呼吸も皆それ自身の爲でなく、畢竟身體全部の健康を維持するといふ大目的の爲に奉公して居るのである。かやうに個人は團體の或は四肢となり、或は胃、心、肺等となりて、團體全體の目的を奉して、之か爲めに働かねばならぬものである。個人の價値は茲に存し、人生の意義はこゝにあるのである。此見點はやがて國家主義又は國家社會主義といふ主義の見點なのである。

此第三の制限には猶一の場合がある。それは意志は直接に自我の満足を要求する外に、他我の満足するのを見て大に満足することがある。即ち力によりて服従を餘儀なくせらるゝのでなく自ら自己の意志を制して他人の意志を満足せしめて満足するの性を有するのである。是は自我意志が自ら設くる所の制限である。人に若し此精神なくば助けなき幼兒は如何にして生活を遂ぐる事出来るか、世の鰥寡孤獨者は如何にして生活することが出来るか、かく人は他人の爲めに犠牲となることありて、人類社會は安寧に幸福に生活することの出来るのである。是れこそ眞に人の果すべき務である。是れ

所謂愛他主義といふ者の見方なのである。此國家主義や愛他主義といふは、予が所謂没我心の必然の發動なので、實に已むを得ない、否なくてはならぬ人生活動の半面である。若し此動きがなくば恰も求心を失ふた天賦の様に支離滅裂、協同生存といふものは全く破壊せられてしまふてあらう。吾人は飽まで此没我心の必要を唱道せざるを得ない。此の如く此等の主義は人生必至の理に根帯するものであることを忘れて、個人自由主義を唱道する淺薄なる議論には固より首肯することの出来ぬのである。

此主我没我の兩精神は人生の二大原動力で、人生のあらゆる活動は此の二原動力の生み出したる現象である。此の二力は過去の歴史を形成し、現在の歴史を形成しつつあり、又將來の歴史を形成することであらう。併しながら何といふても、主我心は飽まで我を主張せんとする精神で、没我心は飽まで我を没しやうといふ精神であつて、其方向は實に正反對を表はして居る。一方が東方を指せば、他方は西方に向ひ、一方左といへば他方は右といふのである。若し此の如く其方向の全然互に反對せる二力の對照が、明かなる對照として己心の中に存する間は己心は常に左支右吾煩悶擾亂して片時も安慰の状態にあることを得まい。然るに吾等自身の經驗に徴すれば、吾等は決して常住此二力の對照を感ぜず或る状態に於いて調和均衡を得て平靜を感じつゝあるのである。而るに

此均衡調和の状態にも自ら三様の形式あることを發見する。

第一の状態は我を一切滅却したる状態である。即ち意志を滅却してあらゆる欲求即ち煩惱の繫縛を斷滅するのである。或は衣食住の欲、或は社會上の欲等を打ち滅して、無味恬淡を極めこみ、枯木死灰の如くなる状態である。若し果して此の如きことが出来るとすれば茲處には、我を主張せん的心もなかるべく、又之を滅するの要もないであらう。之をも調和安慰といひ得へんば、如何にも一種の調和安慰であつて、是等は即ち小乗の悟、シヨールペンハウエルの悟である。併し此の如き調和は吾人の欲せざる所の調和である。既に我を滅し、意志を滅したる以上は、これ活動の泉源を絶やしたもので、すべて無である。無は如何にしても調和すべきやうない。調和は、有るものを調和するのである。のみならず、よしや此我非我の差別の根本たる意志を滅却することが出来るにしても、それは、折角萬物の靈長と謂はるゝまでに發達し來れる人間を、意志のなき當初の劣等動物の状態に逆行をなさせんとするものである。實に面白くない了見である。間違つた悟である。

第二の状態は初めよりして意志は諸種の制限をうくるものと合點觀念して、障礙をうけたならば、その障礙を自分の意志の力で果して打ち砕くことの出来る障礙であるか否やを一度當て試みる。若しそれが出来るならば、如何なる場合でも、

之を打ち砕き、もし出来なかつたならば、障礙をうけたなりに、曲り折りして、少しも凝滞する所ない。恰も河流が或は巖を碎き、山を曲りて蕩々としてその流れの面目を改めざる一般である。意志は自己の目的をそのまゝに必ず成遂することの出来るものと思へばこそ、その障礙をうけた時には失望もあり、落膽もあり、怨恨もあり猜忌もある。もし始めより、意志は他の諸種の制限をうくるものとさへ合點、觀念してれば失望落膽もなく怨恨猜忌もある筈ない。失望、落膽するとか、怨恨猜忌するとかは、是れ女々しき意志で男子の意志でない。世間の泣く者をして泣かしめよ、笑ふものをして笑はしめよ。而して譏る者をして譏らしめよ。譽むる者をして譽めしめよ。世間の譏譽褒貶は我が自己の所志を成遂するに於て何等損益する所ない。是の一半はニーチエの悟で、又一半は現時精神主義と標榜する人々の悟であらうか。是れもまた一種の調和には相違あるまい。併しながら、眞の調和は嘈々の大弦と切々の小弦とが兩々相並存してこそ眞の調和はあれ。唯々一方の弦のみ大に緊張せしめて高調子となし、他の弦をは緩めて一種の囁の如くして、此高調子の中に他の囁を葬り去らんとするは、一方にのみ耳を借して、一方には閉つる處の悟である。是は一種面白悟ではあるが、予は究竟の悟と思はぬ。此以上に一種の悟がある。

第三の状態は所謂我非我の差別以上に超越して之を調和す

る所の状態である。それは如何なることかと云ふに、既に我非我の差別の立つたる以上は其と同列に於ては到底調和することとは出来ぬ。猶一層高き所よりしなければ調和は出来ぬ。そもく我非我の差別は凡俗の差別である。小き我と小き非我との差別である。大きな我から見れば共に其一半で小き我や小き非我は皆その一我の中に攝すること出来る。親は子の爲、子は親の爲、夫は妻の爲、妻は夫の爲、或は友人が友の爲め、個人の國家の爲めに小き我を滅すと見るは、實に却て大なる我を生かす所以であつて、死滅却て生起を意味するのである。

小き我を主張するも、大なる我の實現の爲めである、小き我を滅すと見るも、大なる我を實現する爲めである。小き我の一去、一來、一消、一長は皆此大なる我の實現で調和するのである。世に若し眞に悔ひ改めたる生活、或は魁りたる生活と云ふものがあるならば、それは實に此觀想を身に軀したる生活をいふものであらう。

是れがやがて一乘の悟で、現代の自己を實驗するが人の道といふも此の悟である。而して加藤博士と井上教授との悟であらう。兩博士は學士會院の講演に於いて互に辯難せられたるが、實は兩博士は同じやうな悟に達して居るではなからうか。井上教授の大我、小我の論議は言を哲學上に立て、居らるゝから一見加藤博士のと違ふやうに見ゆるけれども、そ

の世間の應用を示すに至るは、つまり加藤博士のと同じやうなる軌道を進むことであらう。又加藤博士の愛己説は飽まで言を經驗上に立て、居らるゝが故に、一見井上教授の見と違ふけれども、その倫理意見の究竟原理を推したならば、井上教授の見と歩調を一にせざるを得ぬであらう。幽邃な哲學説から世間へ下した井上教授の見は、是れ加藤博士の愛己説で、卑近なる經驗説から哲學界へ推し上げた加藤博士の見は、やがて井上教授の大我、小我の見であらうか。

又近頃姉崎潮風兄と、高山樗牛兄との往復が屢々太陽紙上に現はれて、大分世界を賑はしたやうであるが、予が此眼光よりすれば樗牛兄のは飽まで意志の主張といふに、安心してその日蓮を稱揚するもそのニーチェを鼓吹するも、皆その見地からせるゝものゝやうであつて、予が所謂第二の悟である。然るに潮風兄はショーペンハウエルの沒意志にもニーチェの主我意にも安心の契機を發見すること能はずして、それをばググナーの愛に認めたといふやうに聞ゆるので、是は予が所謂第三の悟に近いやうに思ふ。

所謂第三の悟はかうである。主我沒我(小き意味にての)は世間の二大原動力であるから飽まで之を活動せしめ、その調和の基準をば一層高い處の大なる我の圓成といふ處に置くのである。猶此の悟の、心理上の基礎たる同情てふことについて説きたいけれども、下手の長談義は只讀者諸君子の倦怠を

社 會

佛教各宗派を戒む

嗚呼佛教各宗派の當局者諸氏、近時諸氏の舉動あまりとは云へ、如何にも言語道斷にあらずや。衰餘の現時各宗派に對して固より多くの望を屬せずと雖、せめては耻を晒し、自ら傷ふの愚をなす勿れ。佛教決して自ら滅ふるものにあらず、之を司るもの滅す也。佛教他より敗るものにあらず、身中の蟲は自ら之を腐蝕する也。近時新紙は各宗會議の醜態を傳へたるの後、猶宗教法案につき報じて曰く。

政府の宗教法案に最も反對したる大谷派も内局の變更より、可成政府に讓歩すべしとの方針を取り、本派木邊派亦た深く政府に賛成たるべければ、今日の處政府も同法案を議會に提出するに至らんかとの説あり。尙ほ同法案に關する各宗派の委員は是まで九名なりしを五名と爲さん爲め、旁、近日開會すべき宗教法案各宗管長會は左の議案を議する由。

- 一、宗教法制定に關し政府と交渉する爲め全權委員を選擧する事
- 二、委員は現今制定の宗教法草案に據り交渉する事
- 三、宗教法案に係る委員は五名とする事

招くばかりであるし、又以上で大概題意は説明した積であるから此邊で御免を蒙るとしやう。(完)

去月二十九日愈若狭丸に乗して倫敦出發、セイロン印度等の地方巡回の途に上り候。海上極めて平穩、今朝當地に着す、本年未多分面會の榮を得べくぞ存候。早々。

九月一日 ポート、セツド發

若狭丸にて 松本文三郎

御序の節は待山兄にも宜敷御聲を乞ふ。

九月二十五日當地着、佛跡探求の爲め、當嶋の舊部 Annual Inpura & Ahimale に至り申候。氣候酷暑なれども學術上極めて有益にして非常に愉快に存候、當地の僧侶は小生の日本より來れるを聞き大に喜び頻りに談し居り申候。アマラダプラの僧は小生の健康を祈り、特にダゴバ(寶塔)より擲り出せる Sripunahambahu 王の古銅貨七個を贈り申候。本月六日當地發、ボンメイに向ふ筈に候。早々

十月三日 セイロンに於て 松本文三郎

而して五名の全權委員の割當は本派一名大谷派一名曹洞宗一名眞言宗一名日蓮宗一名にして他の小宗派は委員を出さざる筈なりと

吾人は之を盡く信するものにあらず、されど大躰、現時の各宗派が不整頓の狀況を以て、法案の制定を政府に交渉するが如き愚の極たるもの、各宗の交渉なるものが何等の效果なくして、却て法案提出の口實を政府に與ふるものたること、前年度既に各宗が實驗せし所にあらずや。當時吾人は深く之を戒めたるにも拘はず、遂に不完全なる法案をつゝき出して、自ら處する道すら知らざりしにあらずや。各宗は亦其愚を再演して、佛教の形骸すら自ら粉砕し去らむとするか、吾人は各宗か宗教法案の問題に手を着くるを見て、稚子が刀劍を弄し、盲人か斷橋を渡るの感あり。其現今制定の草案なるもの其政府と交渉を開始する、一々感服すること能はず、吾人は各宗か斷然手を控へて其宗教的事業の經營に力を傾注せんことを勸告するもの也。政府たるもの亦此の如き不急の問題に着手して人心の動亂を招くが如きは恐くは爲さざる所ならむ、政府者にして猶進むて之を爲さむか。是政府自ら禍源を作る也、動亂を招くなり。吾人は宗教的精神の指導する所に從て斷々平として行動を云爲して可也、一言以て戒むること此の如し。

佛教家の海外行

來月佛領河内に於て東洋學會開會せらるゝに付き之に出席せんが爲め、南條博士、高楠大學教授は本月六日を以て航海の途に上らるといふ。曩きに歐洲に於ては獨逸ハンブルヒに東洋學會を開かれ、今亦亞細亞に於ては佛領河内に此會を開かるゝに遇ふ。西人の東洋事物の研究に着眼するもの益々多きを加ふる、以て知るべき也。此際諸氏が多年研究の結果を齎らして親しく此會合に出席して一は東洋文明の真相を紹介し、一は西人研究の結果を視察せらるゝ、頗る其效果の揚かざるを確信するもの也。吾人は尙ほ諸氏が學術上の研究、古代の考證に止めずして、現代に於ける東西の思想、信仰、生活、道德等の衝突、調和及び將來の運命に對して詳審なる觀察を下し、世界思潮の大勢が如何なる方向に動きつゝあるかを看取せられむことを切望するもの也。

又井上圓了博士は教育學術等實地視察の爲め、本月中旬を以て、印度及び歐米各國に向て渡航せらるゝといふ、氏は十數年前既に歐米を漫遊せられしが、多年實地施設の後、今や再び視察の途に上らる。氏か實際的觀察眼は必ずや西人が耐忍不拔なる根柢と敢爲厲行の經營力に於て、必ずや觀得し來ること決して小少にあらざる可し、吾人は、氏が釋尊の靈蹟に詣するの外に猶、印度か衰頹の社會的原因が何れにあるか、歐米の教育制度の外に宗教々育が如何に人心の奥底に達せるかを視察し、政治政黨國家經濟、社會問題、教會組織との關係

記す、最も眞面目たるべき宗教雜誌にて多少此憾あるものあり慎むべき事也。

海外事情

皇帝の演説——宗教を侵さるゝこと——固有の習慣 舊教の改革——ナルテン教師の跋扈——假 教 監

▲獨逸皇帝の演説 フロイセンの北にあるポーレンといふ處はもと獨立國であつたが、遂に露、埃并にフロイセンの三國に分割せられた。併し人民は未だに昔の獨立國であつたことを追回して、フロイセン政府の處置に不満を抱いて居るものが多い。殊に宗教上から見てもフロイセンは大抵新教で、ポーレンは舊教國であるから洵に折合が悪るい。例の開明戰爭以來加特力教會（舊教）は取分けフロイセン政府と仲が悪い、殊にポーレンは反獨逸主義の風潮が行はれ、且つ舊教地方であるから加特力教會が萬事に付、ポーレンの味方をしてゐるため猶更である。現今ポーレンに於ける宗教々育を施すにポーレン語を用うべきか、獨逸語を用うべきかに就て非常に議論のある所で、フロイセン政府は獨逸語を用うべしと主張し、ポーレン人民は獨逸語を用うるとに反對し、そしてポーレン語はもと耶蘇の話された語で、ポーレン語は非常に神聖であるとの妄想を抱いてゐる。若し獨逸語を用ゐるとせば、人民

を審査し、我國將來の教育及び宗教の上に資せられむことを切望する者也。 海外萬里、寒暑常ならず、大法の爲め、切に諸氏の健康を祈る。

新聞紙の品格

人、個人として品性を陶冶する必要ありとせば、社會として亦品性を保つゝの必要あり。人個人として言語を慎重にするの徳義たるを知らば、社會として言語を慎むの徳義あり。而して近時新聞紙の言語何ぞ夫れ醜惡なる、新聞紙は自ら揚言して他を啓懲すといふ。然れども一讀の下毫も矯風の眞情を感ぜず、唯徒らに他の惡を許さ、快哉を呼ぶものに似たり、是猶可なり、甚しきに至りては腐敗の實況を叙して他の好奇の心に投せんとするが如き傾向あるに至りては斷じて不可也、新紙に詳記せる犯罪の記事が他の犯罪を誘ふの助けとなるの多きは實際調査上争ふべからざる事實也、豈戒しめざるべけむや。言語動作粗野なれば確かに其人の品性を損ず、現時我國に於ける新聞の文字と挿畫とはたしかに我社會の品性を損ずるもの也。近時、新聞に記載せる文字の如きは、吾人多讀に堪へざるものあり。又社會的方面に最も注意すと稱する某新報が、たとひ講談とは云へく、紋々の人物が出刃庖丁を振り回して居る如き挿畫の入れるものを西洋に送り來りたる時、西人の眼に頗る賤しく映じたる事ありき、序てに

は獨逸化し新教化してしまふやうに考へて居る、現に宗教々育事件の爲め數十人の者が獄に投じられた。加特力教會は是等を慰くさめん爲め、盛に寄附金を募集して力を盡くして居る、ポーレンは地理上又は法理上から見ても、フロイセンの一州たることは免れぬけれども、互に融和し同化し去ることは容易な事ではない。

▲此等の狀況に對して八月中旬過、獨逸皇帝はポーレンに行幸せられ、そして左の如き意味の演説を試みられた。 ウイラモウイツ男爵が朕及皇后に對して、ポーレン州の意向を發表せられたる愛國的の辭は深く満足とする所である。朕は此處に於て一の忠實なる獨逸國民の中に居るのである、獨逸國民か此地方を隆盛ならしめん爲、爲す所の仕事も亦忠實である。此仕事の目的を全体の利益となるやうにするには、第一獨逸國民は遺傳の黨派的排斥の弊を改めねばならぬ、即ち各人は國民全体と共同して働かん爲めには其特長を犠牲に供する覺悟せねばならぬ、政府の官吏は朕の命令に猶豫なく服従し、朕か地方の安寧福利の爲め適當と認めたる政策を實行することは勿論、帝冠の指導の下に國民互に一致協力せねばならぬ。朕は朕の獨逸國民にあらざる臣民の一部が兎角本國の事情に暗い爲め折合悪しく圓滑を欠くのは深く嘆ずべき事である。 ▲是には二點の誤謬がある、第一は宗教の範圍を侵さるゝ

といふ懸念。若し朕の臣民にして加特力教會に屬する信者が迫害を被りて、其信仰の力より分離せらるゝであらうと云ひふらすものあらば、これ正さに重大なる詐僞者である。朕の即位以來の政治及びアーヘンに於ける演説は（本誌八十五號海外時事參看）朕が宗教即ち各人の神に對する個人的關係を如何に重要視して居るかを證明して殘す所はないであらふ。右の如く云ふや、からはかゝる謠言によりて何人も自己の信する所に從つて幸となるべしと宣告したる大王（フリードリヒ）の幸樂を侮辱したるものである。第二の錯誤は民族固有の風習を打破せらるゝと云ふ懸念である。元來プロイセン王國は多くの民族より構成され、そして各民族は各自互に歴史及び其特徴を誇りて居る、けれども此事は善良なるプロイセン人民たるに就いては決して妨げない、故に此州の人民も此事を忘れないやうに勉めて貰ひたい。祖先傳來の舊慣は其儘保存して敢て差支はない、併し舊慣は歴史である、歴史は即ち過去に屬するものである。朕は今此處に於て只プロイセン王國あるを知る斗りである。朕は朕の祖先の事業に對して、此のボレン州はプロイセン王國と離るべからざる即ち不可分の結合されてあると思ふ、故に朕は常にプロイセン及び獨乙と同様であるといふ事に對して責任を有つて居るものである。朕は風光の美なるライン河畔に成長したる、葡萄酒の美酒を以て、茲に祝杯を擧げ、ボレン州及ワルテ河畔の其首府の幸

福を祈るものである。

此演説に對して新教徒はいたく喜んで居るに反して舊教徒は暗に不快の念を抱いて居る、從てボレン人は概して不満を呈し、皇帝の演説はあまり激しきやうであるとは一般の批評である。心あるものは苟に憂へて居るとの事である。

◎英國の加特力改革運動

近刊のフットナイトリビュ

ニ（隔週雜誌）に、ガルトンと云ふ人が英國の加特力教會内部に普通教師の多數が團結してオルデン教師に對して一種の改革運動を起し、大教監グラーガンに其實行を迫りて、遂にプロイマ教主の手許にまで事情を訴へしとの報道を掲げて居つた。ところが、隔週雜誌の二記者が大教監の許へ此事を聞合した處が、留守中であるとして教監參議のジョンソンと云ふ教師の代て答へるには、そんな改革運動は一向承知しない、又そんな改革呼りせらるべき不都合の理もないと答へたさうだ。

▲ノコデ加特力教師のハローランと云ふ人は、デーリー、クロニクロに公開狀を送りて、大に其言の虛妄なることを辯ぜられた。其書簡の中には私は英國に於ける加特力改革運動に従事して居る代表者の責任を有するものである。而して巽にガルトン氏がフットナイトリビュ（隔週雜誌）に彼事項を公にしたるは吾々より委任されたもので、決して事實無根のものではない。私は今此の書簡の中に千九百年の七月及八月にプロイマ政府の宰相ランボルラン及び大教監のグラーガ

雜 錄

死の實際的研究

安藤 正純

に宛てたる二通の書面を封入して送つた。其中ランボルに宛てたる書面には教主は英國に於けるプロイマ加特力教の状況を審に知るの必要がある。何となれば教主の教令に背いて凡てのオルデン僧が、此英國の稍々大なる町に入り込み其凡てに富んで居る教區を占領し、而して彼等は普通教師の如き生活をして居る、彼等は貧清順の誓約に違反したる行動をなして居る、彼等は普通教師を迫害して教師と信者との間に争を起さしめ、かくして信者を加特力教會より分離せしめ、又は新に加特力教會に入る者を妨害することが甚しい。プロイマ政府は少數の歸依者と雖、一々報道によりて知ることか出來やうが、幾百人、幾千人と云ふ加特力信者は教會より分離して行くことを知らぬであらう、これ全く教會行政の不行届からである、オルデン教師の仕打がわるいからである。吾々普通教師の大部分は茲に一致結合して、吾々の權利及特權を保護し、オルデンの襲撃に對抗せんが爲め。ローマ政府は代表者を派して吾々の抗議を調査せしめ、救済の道を講ずる迄は、余は選舉によりて假教監に任せられたる者であるとの意味がかいてある。

◎世界最大の樹木

はカリフォルニアに於て發見せられた、其周囲は百五十四尺直徑五十一尺と云ふ大木である。所が、從來一般に大木と認められて居つたものは周囲百一尺の木であつた、此木は今に倒れてしまつたが、長さ四百三十五尺の事である。是等は僅に世界第一の大木であらふ。

昔波斯の英雄ザキザスが百万の大軍をひきゐて將に希臘に入らうとするとき、遽然として人生を思ひ、嗟乎予れ百年の後は何處にあるやと、一念こゝに及んで勇氣頓に沮喪し、暫らくは茫然として長天の空を望んだといふ話がある、まこと人間一度び死に思ひ至るときは智者と愚者と、勇者と怯者とを問はず何人か愁然として長太息を發せざるものがある、死を悲むはこれ人間の常情であつて死を見ることに生に歸するが如しなどいふは所謂修養の力を以て他の大なる精神作用の爲めに死の觀念を漸く小にして、遂には忘れたるが如くするのである、道を求むる者はこの處に於て苦心研鑽、幾多の難關を切り抜け、幾万の惡魔を降伏して、以て大安心に到達するのである、が死其者は依然として悲しむべき者、悼むべき者に相違ない、然るに人間の根性は浮薄のもので或る時は死を思ふて悄然たることあるも、宛かも夕立の雲の如く、片端からドシ／＼霽れて時を経ずに全く忘す、又其の忘すするのが人間世界の常態で、彼此詮索するのは徒らに憂患

を増す所以で却て誤て居るかも知れぬ、然かし一度び人生に就て疑を起したるものにはこれを高閣に束ねて置くことが出来ぬ、忘するところではない寧ろ苦悶の餘り忘すを望むも、いつかな忘すを許さぬのである。

乍併、死の問題はいかに思索を廻らすとも、到底浮世的問題は解釋することが出来ぬ、若しこの問題を以て他の百般の問題を見るが如く、人間的、浮世的に解釋せんとするならば、縦令百千万劫を経るとも、解決の時機は到来せぬものとしてよからうが、此の問題を浮世以外、人間以外に持ち出す迄には幾百幾千條の浮世的、人間的徑路をたどらねばならぬ、求道者の困難はこゝに在るのである。

人生五十、五十年といへば長いやうであるが、過ぎ去て見ればまことに短かい、試に三十歳の青年己の經歷に就て回顧一番せよ、生れてより二十歳位迄は何人も自覺力が薄く、有耶無耶の間に過ぎ去てしまふ、二十歳世に出るものと假定してそれより十年、二十歳の時に至て既往十年間を回顧すれば、まことに夢の如く、幻の如く、悔懼の念は交々起るであらう此の時に至ては人生の觀念胸奥に湧き、あれも、これももの醜態たる要求に心を苦しめ、とやかう案じ煩らふ間に光陰は電馳し日月は疾走す、かくして十年の將來はまた、く間に過ぎ去らん、四十歳の曉、十年前の今日を回顧せば、三十歳の今日、既往十年を回顧したるときよりも更に一倍果敢なき十年なり

後者に由らば達せずとも樂天主義の一代たることを得る、されば後者は寧ろ安心を得たものであらうか、されど覺者の眼より見れば誠に憐れむべき不幸福の一生であらう、蝶は人間の苦を有せぬ、長閑なる春の野に花の香に酔ひ戯る、幸福者である、されど蝶は憐れむべき不幸福の果報である、

死の場合に就てもまた問題がある、人が死を恐るゝは畢竟死を悲しむの情から起るのである、さすれば死といふことを自覺せずに死に下らば死を悲むの苦悶がなく泰然として死に就くことが出来やう、然らば大切なるは死其者の場合である、惱充血で死んだならば恐くは死を自覺せぬであらう、心臓破裂が死の場合であれば又死を認識せぬであらう、老衰病で枯るゝが如く死んだならば、よし死を自覺するとも自覺力が薄いであらう、若し戰場で敵彈の爲に斃れたら、死を自覺しても渾身勇氣の爲めに死其者については殆んど忘るゝが如くであらう、されどそれは餘りに不本意ではないか、チヨット友人の家遊びにいつても歸る時は暇乞をする、三十年五十年の荷且ならぬ人生を辭するに自から之を知らずにとるといふは、何となく心残りではあるまいか、精神安慰の結果として此の如き大往生を遂ぐるならば甚だ喜ぶべき事であるが、一生中に只一遍のかゝる大切なる場合に、身体上の生理的關係のため靈妙なる精神を朦朧たらしむるといふは誠に残念千萬である、

しを、感ずるであらう、四十は既に半白の老人、人間の定命は早や十年の後に廻り來るのである、七十八十まで長命する人も世にはあるが、生れ得て羸弱の身のそれは到底望まれぬことである、かく觀じ來れば人生問題について自覺の起りし其の時は既に人生の半以上を過ぎ去て居るので、三十歳の其の時よりは僅か一と昔といふ夢のやうな十年を二度繰り返すだけの時間の外はないのである、而かも人生無常、老少定まらず、如何なる死の縁に遇ふてさなきだに短き命數を縮むるやも計られぬ、ボンヤリ五十年とか、一生とかいふときはさも長く、遙かの遠山を望むが如く觀するも、熟ら考ふれば誠に短き運命である、何故人生を五十年と定めたであらうか、せめて百年を有すれば、幾何か慰むるところもあらんなどと思ふこともないでもない、

かく無常の念の起るは畢竟死を悲むの觀念に基する、そこで人生の無常なることは如何程苦悶するとも詮のないことであるから、其の無常の人生を世渡するに、常に無常といふことを念頭に置くか、寧ろ精神を麻痺せしめて所謂醉生夢死の有様に日を送るか、何れが安心の道に近きかといふ問題が起る、前者は眞面目ではあるが人生を悲觀して厭世的の傾となることが免れぬ、後者は愉々快々の日送りは出来やうが、畢に人生の眞意義を解することは出来ぬ、前者に由て達せずんば一生苦悶の間に彷徨して一道の光明を見ることが出来ぬ、

之に反してかういふ様にも考ふることが出来る、人が死を恐るゝは畢竟死に就て諦めがつかぬ故である、されば死なねばならぬ事情の下に死といふことを十分に自覺せば、未練なく安心して死に就くことが出来やう、一刃の下に積念を晴らし返へす刀に我が咽喉を抉らば死は敢て悲しむべきものではないから、相慕ひ相戀ふ者と潔く情死せば死は却て満足のものであらう、一死以て節操を全うするといふ場合には死は寧ろ節義、名譽の手段として喜んでなさるのであらう、若し、十年の長病肉落ち骨立ち、世のあらゆる方面に絶望して後ち來る死は敢て死其者を悲しまざるのみならず、却て之を待ちもってくるの感があるであらう、されどそれは餘りに悲劇であるが、この方が人生の本意義ではなからうか、

苦しそれ百尺竿頭に一步を進めて死の觀念が念頭に浮び來らざるに至らば、开は即ち悟道であらう、されど醉生夢死は我が取らぬ所である、

旅より (二たび)

和田教兄足下、兄よ！予は兄の想像の如く非常なる清らかなる生活を仙臺に見出すを得たりき。宿する處は三好學兄の家庭、令息令嬢嬉々として樂み學生二人頗る宗教的傾向を有するの人、令妹令夫人日夜主人と共に心よりの待遇到らざるなし。來仙已來前後五夜、三好兄と枕を

並へて眠り、語る處信仰的精神的ならざるはなし、予は兄に此樂しき生活を告ぐるの幸を得たり。兄よ、道交會の發達は寔に意外なりき、予は未だ此の如き健全なる將來望ある佛教の會を見ること實に尠かりき。道交會は二棟の寄宿舎を有せり、廣大なる庭園を有せり、しかも其家、其園、何れも質朴にして窓前草三尺、古池あり、菜園あり、我が宗教的同胞二十三人衣食を共にし生活を共にす。柴門曉出霜如雪。君汲泉流我拾薪の精神的交際羨むべき哉。樂むべき哉。而して現時寄宿舎を有せずして精神の內的制裁のみを以て、全校の道徳を維持せむとする、第二高等校に於ては實に此寄宿舎學生は、隱然精神中心として全校に重きを有せりと云ふ。兄よ、予は十六日夜仙臺に着したり、十七日は細雨霏々たり、同日は短艇競漕の日たりしも中止なるべしと思へり。主人三好兄は朝五時松島に向て去りてより、正午に至るも歸らず、乃ち道交會の信友に伴はれて松島に遊ぶ。兄よ、予は正さに苦悶の舊跡を見舞ひたり。停車場より松島に至る道中、車上合掌して感謝の涙に咽ひたり。兄を誘ひて雨中屢々語りたる屋根の下を初めとし、一も當年の事を想起せしめざる事なし。瑞巖寺に詣す、正さに古社寺保存の爲めに修葺中なり、年少の清僧茶を煮てすゝめらる。臨濟の淡生涯吾人に向て一擲言ふへからざる

趣味を興ふ。無相窟の畔に建てる碑、唐の吳道子の筆に成る觀音の靈像を刻す、予一拜其慈愛の清容に融化せられて欽慕其懐に眠るの感あり。予感嘆措かず、同行の信友手に贈るに其石摺一枚を以てす、歸京の日之を示さむ。雨中の漚漚士氣大に揚る、蓋し校風振作大に見るべきものあり。三好兄雨中漁船甲板上に佇立して身を以て率ゆ、校風の起る豈偶爾ならむや。氏歸りて曰く。徹頭徹尾一人として雨をかこつものなかりき、況んや漚漚延期の語だにもさかざりきと、學生の雄壯を喜ぶ主人の顔亦嬉し。

十八日午前は道交會の寄宿に坐談し、午後五城館にて公開演説、麻生師が信仰の健全なる他の放縱的禪家の流弊を脱し、眞摯欽すべし。島地老師襟度の洒落、高潔脱俗の風見るものさくもの感化少からず、いと盛會なりき。予は「信仰復活の時機」を述べたり、夜は道交會員のみにて新會員歡迎の爲なりき、講師は予一人のみ出席、委員先づ會員より質問を徵す、應じて提出せるもの十問、兄よ、予は驚けり、皆是れ苦悶の聲、飢渴の叫び、極めて適切なる求道の響たらざるはなし。正さにこれ予か言はむと欲せし所、二時間餘、胸中を披瀝し、且つ歐米青年會の起源を述べたり。

る正さに九時過、兄か求道學舎にて講話の時なるべし、會員の一人曰く、感應道交あらざるなきを得んやと。午後大谷派別院に於て二席の講話をなす、一は人生問題、社會問題の解決に宗教を待つ事、一は婦人問題、殊に家庭に於て信仰の必要なる事を辯せり。其謂に曰く、婦人は情の塊也、惡しき方に墮落せばたしかに男子より罪多し、然れども佛の慈悲によりて清められたる時は、炎々たる同情慈愛の念に満たれ、遂に男子已上の宗教的性格を有すと。貴意如何?

同夜曹洞宗中學林樹徳會の爲に講話をなせり。彼の始めは無邪氣にして後には境遇の爲に健全なる發達をなし得ざる他宗の青年僧侶に向て予は大に同情を有するものなり、予は警戒の爲に西洋宗教事情の大勢を述べ其の積極的社會的なるをのべて僧風の刷新を鼓舞したり。あまり言ひすぎて氣の毒にてありき、されど此苦言に對して毫も恨むる色だになし。

二十日は午前師範學校にて學生の爲めに講話を試みたり、審かに釋尊が說法に於て如何に開發的たりしか、實際的たりしか、隨器開導の用意周到たりしかを述べ、最後に兄が求道學舎に於ける演題「人格の感化」の意味を以て教育の極致は宗教にある事を述べ、午後第二高中内に於ける尙志會の需に應じて、講堂に於て我が宗教的實驗を

語る。兄よ予は當年の苦悶を回想し卅二年の再遊を追想し、歸朝後三たび此地に遊びて我經驗を語る、豈感慨なからむや。我經驗は寧ろ我懺悔なり、當時の惡しき心と其後の嬉しき心と力を得たる事と、望を櫻める事等、遠慮なく皆さらへ出して一も殘る所なし。胸中滞りなきを喜び、又言語多くして實行の伴はざるを恥づ。懺悔すればするにつけても亦罪惡は伴ふなり。吾人豈一刻も佛陀の光なくして生存し得んや。噫。

常盤兄の御親父にも遇へり阿刀田君の家庭も見舞へり。前後六日の清遊大に宗教的快樂を抱きて今朝歸途に上らむとす。今夜は宇都宮にて訓覇君の爲に應援傳道をなさむとす、曉來夢醒めて枕上燈影明かなり、感謝の情油然而して起る。乃ち筆をとりて之を兄に寄する所なり。明夜歸京の後親しく兄とこれを語らむ。頓首。

二十一日午前五時 仙臺旅窓にて 旭 村

廿一日の一番電車で仙臺を出發した。六日間親しむた澤山の信友に送られ、何となく名残惜しく別れた。流車が朝暉曉露を破りて勇ましく走る心持は、當年黒雲の中より遁れ出つる氣持で歸つた道と同一と思へぬ。福島の停車場で三島道府と云ふ書を買ふて一體した、彼が經營的手腕は凄しいものであつた、東北宗教界にもたしかに一の三島を築する。午後四時宇都宮に着した、訓覇君の家に應衆が待ち受けて居た、直に一席の講話を試みた、水戸とは亦趣を異にして應衆は儒儒、御料局の官吏、新聞記者中學々生であつた、信仰はあまり固くはないが、中には熱心な人ありて、夜再び質問に來た、一夕訓覇君の書生の淡生活の趣味を味ひ、翌廿三日味爽出發、歸京した。

視 察

模範的安泊「故郷の宿」
(附、下婢宿泊所)

池山 榮吉

●宿泊を目的とする慈善事業の中で、無償的のもの、即所謂『無宿者の安宅』のことは、既に本誌第八十七號に於て述べたが、今回は其の有償的のもの、中、獨逸に於て最も廣く行はれて居る、所謂『故郷の宿』及び下婢の宿泊所に就て御話しすることとして、夫の『徒弟の宿』、『工女の宿』の如きは、宿泊といふよりも、寧ろ寄宿の性質を帯びて居るものであるから、是等はまた後日編を改めて紹介しやうと思ふ。

一、「故郷の宿」

●故郷の宿の目的は、主として職工其他の労働者及び之に相當する階級の旅客の爲めに、安直で而も割合に良好で、且つ安全といふ三拍子揃つた宿舎を提供し、彼等が普通の下等旅宿に投じて、相客又は亭主の誘惑に由り、放蕩、賭博等、諸種の悪風に感染して、經濟的、及び道徳的損害を蒙る憂のない様にしやうといふので、而して之が手段として宗教的に規律し、管理するのが、『故郷の宿』の他の旅宿と異なる特

徴である。
●故郷の宿には、厳格な規則があつて、客同志でも、他の旅宿に於けるが如く、酒は飲み放題、博奕は打放題、馬鹿な話は仕放題といふ譯に行かない。規則の重要な事項は客室に掲示してあつて、之に背くものは追出されるので、客は斷じて骨牌を弄することを得ず、麥酒は亂にさらざる程度に於て飲む分は構はないが、焼酎の類は一切用ゆることを許されぬ。朝は六時に起されて、夜は十一時には床に就かねばならぬ。酔漢は頭から宿泊を斷られる。それから朝夕は宿の内て禮拜を行ふことになつて居つて、客は之に參る様に案内される、併し強いて勤めない、最もその禮拜は極單簡なもので、讚美歌を唱へ、聖書の一節を朗讀し、祈禱をするといふ丈けである。

●斯く一方嚴格な規律の定めはあるが、併し客の待遇は親切を旨とし、可成客の居心のよいやうに取計らふので、『故郷の宿』といふ名稱も、つまりこの意義を表するに外ならぬのである。されば、食品、夜具等に精々注意するは勿論、宿の主人は家内一般の事務を取締る外、親しく客に接して、喜憂とも暖き同情を以て彼等に對し、次第に依ては相談もし、世話もすべき任務を負ふて居るので、要するに故郷の宿といふ名の、其の實に負かないことを努めて居る。

●司、つて居つて、宿の主人は其議決に従つて業務を擔當する。主人には堅實なる信念ある者を選任するので、多くは向内傳道(宗教的慈善事業)に従事する者を養成する學校の出身で、成るべく配偶者ある者を以て之に充てることとなつて居る。主人は一定の俸給を貰つて居る吏員で、自己の計算を以て業務を營む者でない、されば營業の損益を總べて委員會の計算に歸するので、これは主人をして自家の利害に率かされずして、専ら公平誠實に善く其の事業の目的に副ふやうに働かしむるに最も必要のことである。故郷の宿の大多數は皆この寸法で仕組まれ、主人の計算で營業して居る所は極少數である。

●故郷の宿は獨り旅人の宿泊のみならず、其の土地の職工、其他の労働者等の下宿を兼ねて居る所もある。また別に上等客舎(Hospiz)の設があつて、中以上の旅人宿泊を兼ねて居る所もある。或はまた青年會の會場が故郷の宿と一所になつて居る所もある。併し、其會場又は上等客舎が稍々大きなものであるときは、この兩者が一所になつて、故郷の宿はそれと離れて出來て居る所もある。それから故郷の宿で流浪者作事場(第八十四號參看)を兼ねる所もあり、或は救貧應若くは慈善組合が故郷の宿を利用して宿料を拂つて流浪者をこゝに宿泊せしめる所もある。而して多くの宿には労働紹介の仕組が出來て居る。

●宿料は極僅少なもので、朝夕の食事共二十錢乃至四十錢位であるが、併し宿の經濟稍々大きい所では、大抵收支償つて獨立でやつて行かれる。小さい所でも、遺方に依ては利益を見ることが出來やうが、餘り此點に重きを置くと、遂に故郷の宿の本旨に背くやうになる(夫の主人の計算で營業させて居る所では、動もすれば此弊に陥り易い)で、足らない所は主に會員其他慈善家の寄附金及び年々各州の教會で特に故郷の宿の爲めに集めて呉れる寄附金に依て補充することになつて居る。而して地方に依ては、市、町、で、補助金を出す所もある。

●故郷の宿の沿革は如何であるかといふと、先づ其主唱者とも看做すべきは、ボン大學の法學教授ヘルテス博士で、此人は千八百五十四年、初めてボンに労働者の旅宿を起して、自から故郷の宿と命名し、翌年、更に「職工の宿泊所」と題する小冊子を公にし、大に故郷の宿の必要を江湖に訴へた。所が其功空しからずして、追々所々に同様の設備が出來て、千八百六十九年即創立後十五年には、獨逸全國で六十、それよりまた十五年後即千八百八十三年には總計百六十一の故郷の宿が出來たが、丁度其頃、夫の労働者殖民地の創立者ボーアルシュウイングが故郷の宿と流浪者作事場との聯絡の利益を鼓吹してから、急にまた長足の進歩を見るに至つた。

●千八百八十三年には全國の故郷の宿の組合が成立した。

其主要の目的は國中に限らず宿を設立して、旅行中の労働者をして到處故郷の宿に宿泊するを得せしめ、且つ成るべく。宿泊所と流浪者作事場との聯絡を計るに於けるので組合は年々統計を作り、機關誌を發行し、各箇の宿を檢視することになつて居る。千八百八十四年乃至九十年の七年間には新設の宿が毎年平均二十八、次の六年間には毎年平均十六宛あつたさうで、斯る盛況を見るに至つたのは畢竟組合の勢力が大に與つて力のあつたのである。

◎千八百九十七年度の統計に依ると獨逸全國に於ける故郷の宿は四百六十五軒あつて、寢臺の数が一萬六千八百九十九箇、宿泊人の数が百五十七萬三千二百二十五人、内、百五十四萬五千六百五十五人が旅人で、其宿泊日數二百二十六萬三千八百八十五日、二万七千四百七十人が下宿人で、其宿泊數が五十五万八千九百八十六人、會場のあるところが百六十四箇所、上等客舎の設あるところが百五十箇所、労働紹介の設備のあるところが三百四十箇所、流浪者作事場と一所になつて居るところが二百三十箇所、而して故郷の宿に收容して流浪者の數は四十九万七千五百九十四人で其宿泊數が四十六万二千七百九十四人である。

◎故郷の宿は今日労働者の旅行に就ては殆んど必要欠くべからざる設備となつて、其効用の如何に大なるかは右の統計に徴して明瞭である。たゞし故郷の宿は新設側の所謂向內傳居つて、規律を守らないで所内の秩序を紊し、其他同宿者に悪感化を及ぼす虞のある者には宿泊を拒絶する。蓋し宿泊所を墮落せる婦女の集會所と化せしめざる爲めである。

◎下婢宿泊所には下婢養成所の附置されて居る所もある、また別に「故郷の宿」に於ける如く、上等客舎の設があつて、旅行中の婦人を宿泊せしめる所もある。それから、下婢養成所のある所では、多くはまた労働者夫婦が晝間仕事に出る間、其の乳兒及び幼兒を預る所が出來て居る。

◎千八百九十七年の統計に依ると、下婢宿泊所の數は八十九軒で(現今では其數遙かに百以上に上つて居る)、内四十三軒は自分の家で他は借家であつて居て、上等客舎の設のある所は三十七軒で、下婢養成所の附置されてある所が三十四軒である、八十九軒の宿泊所には千六百五十八の寢床があつて、九十七年度に於ける宿泊者は、上等客舎の客を除いて、四万一千三百五十七人で、其宿泊日數は二十万七千三百二十三日、而して宿泊所の手で他に周旋した者の數が一萬四千六百三十二人とある。

◎嘗て伯林で、下婢宿泊所の世話になれる女子の本籍と、梅毒で慈善病院に入院せる女子の本籍とを對照して、多年の經過に依て調査して見た所が、兩者の關係は反比例を爲すものであるといふことが發見された、即ち、或る地方の者で、宿泊所の客となるものが多ければ、病院へ入るものは少く、之

道的一種であるので、舊教側では別に「職工旅宿」といふ類似の設備を設け主として舊教労働者の便利を計ることになつて居る。

二、下婢宿泊所

◎下婢宿泊所は千八百四十七年、巴里に出來たのが抑の濫觴で、獨逸では婦人に關する社會事業を以て有名な牧師フリードナーが千八百五十四年伯林に設けたのを以て嚆矢とする。

◎下婢宿泊所の目的は、主として、奉公せんと爲めに地方から出て來た少女若くは是迄の主家を辭して他に奉公口を求めんとする少女を收容して其一身の風俗上の危害を豫防し、兼ねて紹介の勞を採る仕組である。

◎下婢宿泊所は宗教的規律に依て所内の秩序を維持する點は「故郷の宿」と同様で、特に向內傳道に必要な教育を受けしむるを以て、其管理者として居る所の多いのは畢竟之が爲めである。

◎宿料は至つて少額であるが、其代り宿泊者は掃除、洗濯、煮焚等所内の仕事をすることとなつて居る。併し中には少許宿料を餘計に拂つても、宿泊中は一切家事の煩を避けたいといふものがあるので、是等の者に對しては其希望を容れてやる所が多い。

◎下婢宿泊所には無垢の少女のみを收容することになつて

に反して、宿泊所の客となるものが少なければ、病院へ入るものが多いといふ結果が見えた。以て下婢宿泊所の効用を窺知するに足るといふべきである。

◎下婢宿泊所の外に「淑女の家」と稱して、或は諸種の職業に従事しつゝあるものを下宿せしめ、或は旅行中のもの、若くは、或る職業を求めつゝあるものを宿泊せしめる所が、あるが是れは十年程前からちらほら所々に出來て來たので、まだ廣く一般に行き渡つて居らぬ。

◎故郷の宿といひ、下婢宿泊所といひ、我國現下の狀況に照して必要の設備であることは、多言を俟たずして明らかである。抑もこの事業たるや、労働紹介と密着の關係を有するもので、労働紹介の制を完たからしめん爲めには、是非なくてはならぬ仕組であるのみならず、また夫れ労働紹介に於けるが如く、事業を起すにも多額の資金を要せず、之を維持するにも大した持出しをせずとも濟むので、比較的着手し易い事業であつて、斯ういふ事業が段々と發達すればするほど、一面には間接に、他の所謂安泊、若くは口入宿の積弊を洗滌する捷徑ともなるべきであるから、世の社會的慈善に志ある人が奮つてこれに従事したならば、其功や誠に大なるものがあらふと思はれる。

閑文字

○雨の一夜、隣の島田藩根柢翁來り訪はる、主人公の旭村若翁と予の三人鼎坐して秋の夜の物語をした。翁曰く、昔の犬は丹足を擧げて小便をしたが、今の犬は開化して足を擧げて小便をするやうな、手間取つた事はせむいとのうと。

▲猿は猿、人間は矢張り人間であるから、お互に忠孝の道、仁義の道は勵まればならぬ。如何に開化したとて此の道ばかりは廢るやうな事はない。亞米利加の如き金主儀の野蠻國は大嫌である。

▲親の遺言は守らねばならぬ。涅槃經を讀みなさい、これは佛の言ひ、これに違背するものは、日課のやうにして讀みなさい、離れ有てです。

▲般若とは其名の如く智慧である。即ち古來佛母なりと云ふて居る、藏經の始に第一に此般若經を收めてある。所が私共の從事した縮冊藏經には天台の五時八教に従て華嚴經を先きに收めたけれども、此事に就ては誰も何とも批評するものがない。

▲法華經は八年間といふ長い歳月を経てたつた八卷よりしかない。然るに華嚴經は一週間であの通りの大部である、殊に涅槃經は一晝夜の御説法であの通りのは大部さば、實に驚くべき事柄である。

▲大乘經は藏八百であると思ふと讀めさ、むかし人は云ふて居るが、一体大乘經は信仰の塊りであるから、此精神を讀み破る眼孔がなくては大乘經の大乗經たる奥底を窺ふことが出來ぬ。信仰なき人から見れば、藏八百といふのも強ち無理からぬであらふ。

▲大般若六百卷、この大部の佛書を暗誦する杯は到底吾々には想像し得られないことである。所が、やす／＼とそれが暗誦の出來るまは驚くではないかと、華嚴翁の氣概であつた。篤學の士は當に就いて問ひ玉へ。

▲美しいものは誰が見ても美しい、こゝが凡夫の凡夫たる所以トヤ、チ、忘れた、洗滌にゆかうと思ふて出で來たのが思はず長談談に時を過したさいはれて、フイさ坐を立て歸られた。翁の脱俗せる今更にはすもがなだ。此時窓外の雨尚降り續て居る、余は點滴標を廻るの音をきつゝ、翁が語り殘した一句を思ひつゝ、腕に就いた。一句とは。

生死涅槃如昨夢。

信 家

佛弟子小傳 (八)

近角 常觀

尊者大淨志とは頼吒和羅比丘のことである。此人は頗る清廉潔白なる性質にして、俗的快樂に於て毫も興味を見出さず、専ら清白の法に志して、閑居を樂む點に於て最も特性かあらはれて居た故に、大淨志と名づけたとのことである、如何にも此人の傳を繕くときは其高潔なる志操が想像されて、今日の如き金錢と色慾との爲めに腐敗されて居る社會に對する興奮劑となる次第である。釋尊が拘留國に遊ばれて、轉して毘羅歐陀國に到られたとき人民が皆釋尊の徳化を蒙りて何れも非常に満足して居つた、頼吒和羅も衆中に加はりて法を聽きつゝあつたが、眞面目に道を求むるならば佛の戒めの如く家に居つては自ら淨くすることが出來ないと考へた、夫故他人の人は激びて歸りたにも拘らず、頼吒和羅のみは中道より引き返へして「願くは佛よ、我を哀れ、我をして沙門と作さしめ給へ」と請はれた、佛言はるゝには汝、父母に報せしや、未だしやと頼吒和羅未だ報せずと答へたるころ、佛

の言はるゝには諸佛の法として父母聽かざるときは沙門と作すことも出來ず、又戒を與ふることも出來ぬとの事であつた、そこで頼吒和羅は直ちに歸りて父母に出家を許されむことを請ふた、父母之を聞き大に驚き啼泣して、とても許さぬ、且つ曰く、我子なくして天地日月に悲哀して賜はりたが汝である、一家汝を寵愛し、日夜汝を見て厭き足るを知らない、若し汝か亡くなつたことあるも、我等夫婦は枕邊に坐し、汝か屍を守りて、一生老ゆる覺悟である、然るに今生き乍ら我等を棄つるとは何事であるかと頼吒和羅は失望して、飲まず、食はず、沐浴せず、聽されざる限りは死に就く決心をした、一日二日を経て五日に至るも毫も食せぬ、宗親九族集りて頼吒和羅の意志を翻さむと企てたれど、中々頑として動かさない、そこで止むを得ず、父母に説きて曰へるやう、彼を聽して沙門と作すべし、若し沙門となつて道を樂んだならば、後年生きて相見ることを得べし、若し道を樂まなんだならば必ず歸り來るべし、然るに今日の狀態にては空しく死亡して臭爛して蟲蟻の食となるを免れない、既に氣も沮み、死も近く様子であると云ふた、父母は止むを得ず、涙乍らに之を許して、必ず後日生きて歸り來りて父母に見ゆべきことを約束した、時に佛は毘羅歐陀國を去りて五百里の先の舍衛國に往かれた、こゝで頼吒和羅養生して氣力を回復し、獨り佛を慕ふて出立した、父母別るゝに臨み、聲を擧げて大に哭し、涙

を拭ふて曰く、頼吒和羅よ、去れよ、自愛せよと、頼吒和羅跪きて父母の足を接吻して去つた、如何に當時の佛弟子が道を求むるに眞面目であつたかを知るべきである。

頼吒和羅は佛の所に至りて、親しく感化を蒙り、解脱安心の域に達し、佛に隨ふこと十歳、恰も影の形に隨ふ如くであつた、そこで出家當時の約束に従て、一たび父母を故郷に見舞はんことを欲し、佛に請ふたところ、佛曰く、大に善し、汝去りて、未だ度せざるものを度せよ、未だ解脱せざるものを解脱せしめよ、頼吒和羅よ、今汝の意に隨へと、頼吒和羅直に歸途に就き、我村に達した、彼以爲らく、世尊常に戸毎に次第に食を乞ふことを稱嘆し玉ふ、我今爾かせんと思ひて次第に食を乞ひて我家に至りた、然るに誰も應ずる者さへもない、こゝは沙門は我愛子を出家せしめた故、沙門を惡みて應ぜない、止むを得ず、家を出て去らむとした、恰も家婢が臭爛れたる豆羹を便所へ捨てに往くのであつた、頼吒和羅家婢を呼び留めて我鉢の中に棄てしめた、家婢が其聲と手足の様子にて頼吒和羅であることを覺りて、走りて直ちに母に告げた、母は喜んで若し果して然らむには汝を免して良民となし且つ澤山に衣服飾物を與へると云ひつゝ走りて夫の所に往きた、夫は恰も中庭にありて頭を梳りつゝあつた、夫之を聞くや否や髪を斂めつゝ走り出て、彼を索めた彼は街の曲り手の屏處で彼の臭き豆羹を食ひつゝあつた、父見て大に喜び、

頼吒和羅よ、我と共に家に歸り、美飯を食すべしとて彼を伴ひて來た、母は大に喜び家中の奴婢を呼び集め、彼母が結婚の時父母の與へたる金銀、白珠、一切の珍しき寶を中庭に堆く積み重ね、上に白き布を以て覆ふてあつた、其高さ殆んと人の身を隠す程であつた、母覆布を去りて彼に謂て曰く頼吒和羅よ、今盡く之を汝に與ふ、取るべしと、頼吒和羅曰く一つ、説きたき事あり、聽かる、や、否や、母曰く、何事にも聽くべしと頼吒和羅曰く、彼の覆ひをなせる新らしき布を以て囊を作り、其中に此金銀を盛り、車に載せて、恒河の畔に到り、其最も深き處に到りて之を投ずべし、何んとなれば、之が爲めに人をして憂多からしめ、或は盜賊を恐れ、或は水火を恐れ、或は怨家を恐れしめ、愁感啼哭、快樂を得ざらしむ」と云ふた。如何にも思ひ切りた言ひ様である。

かく母は財寶を以て頼吒和羅の心を奪はむと企てたれど、毫も其効なき故、母は彼が家に居た時親しみたる美人妓女を沐浴化粧せしめて、舊情を陳べさせた、彼は却て此等の女に對して、姉を以て呼び、亦妹を以て呼び、且つ曰く父母よ何ぞ相燒はしむるを要せん、唯飯を施さむと欲せば、時を以て之を施せよ、と、父母坐より起ちて身を潔淨し、種々美味を備へた、彼は食し了りて法を説きた、父母は一小床を取りて別に坐して法を聽き、大に渴仰の念を起して歡喜すること無量であつた、如何に頼吒和羅の胸が清らかにして一點の滯な

かつたかを見るべきである、今其精神が説法の上で明かにあらはれてある。曰く、

此嚴鋸の形を觀するに、珍寶瓔珞等、右樂にして其髮を繋る、紺黛眉目を畫く、其愚痴の人を欺くべし、彼の岸に度るものを誑くべからず、衆の好練の色を以て、臭穢の身を莊嚴す、此愚痴の人を欺くべし、彼の岸に渡るものを誑くべからず、衆香遍く體に塗り、雌黃を以て其足を黄にす、此愚痴の人を欺くべし、彼の岸に渡るものを誑くべからず、身に淨妙の衣を服し、莊嚴すること猶幻化の如し、此、愚痴の人を欺くべし、彼の岸に渡るものを誑くべからず、鹿の羆總を斷絶せよ、及び鹿の門を破壊せよ、我食を捨離し去る、誰か鹿の如く縛せらるゝを樂まんや。

頼吒和羅はかく非常なる刺撃を以て父母を戒めた、是より又彼が幼少の頃よりの親友たりし國王狗獵を感化するに至つた、城外に此王に屬する一樓觀があつた、其園林に維薩勒と名くる樹があつた、頼吒和羅、父母を去りて此樹の下に坐して居つた、其時王は出て、獵せんと欲し、此樓の番人に掃除せしめた、所て番人頼吒和羅が端坐して居るのを發見した、王は常に彼を慕ひ居ることなれば、番人は之を王に告げた、王は直ちに頼吒和羅を見て、大に喜びて曰く卿は我が幼少よりの親友なり、若し財物が必要なれば如何程にても之を遣らむと、頼吒和羅曰く、我今重擔を棄て、牢獄を解き去つ

た所である、然るに王は復牢獄重擔を持て我上に着けんとするかと、王曰く然らば何を以て卿に遣らむと、頼吒和羅曰く、王但思へ、五穀豐熟して、民安く、我國中食を乞ふて得安く、吏民をして卿を侵さしむなきやうにと、王其高潔に服して頼吒和羅に尋ねて曰く、世間の出家して沙門となるものは多くは其境遇から來るものである、數へて見るに大抵左の四の事情の何れかに原因する、一には年者、二には病瘦、三には孤獨、四には貧窮である、然るに卿は頗る春秋に富み、身體は健康で、父母は非常に寵愛し、國中第一の富家家である、之にも拘はらず卿が沙門となるは何故であるかと、頼吒和羅答て曰く佛は是の四事を以て常に自ら説き玉ひ、人を教誡し玉ふ、我心中深く佛の言の如く信仰して出家した次第である、抑々人生は誰か老を避くるを得べき、又病を避け他人代り死するを得べき、又人死する時誰か其妻子眷屬を伴ひ得べき、財産を持ち行くを得べき、却て死に至るまで愛欲財産に耽るものは人が却て財の奴隸となる次第であると、王曰く我適切に之を感じず我が爲めに廣く説けと、頼吒和羅曰く王年二十、三十、四十に至りて氣力盛んにして射戲走馬等自ら視るに雙無かるべしと、王曰く然かりき、然れども今年長し、氣力衰へ、度を過す能はず、頼吒和羅曰く是佛の説き玉ふ第一事にあらざるや、又曰く王病あるの時臥床の下に傍臣百官を呼びて病苦を分たしむる事を得るや、王曰く否、頼吒和羅曰く是佛の説き

玉へる第二事にあらずや、又曰く王毘羅歐陀國及び豊かなる後宮、富める倉庫を有せり、王死するの日此世より持ちて後世に至るを得べきか、王曰く否、頼吒和羅曰く是佛の説き玉ふ第三事にあらずや又曰く王、人民熾盛、五穀豐熟せるや王曰く然り、彼曰く人あり、東方より來り、至誠王に語らむ、東方に大國あり、五穀豐熟、人民熾盛なり、我道徑を識る能く王の兵を持って其國を攻め取らむと王之を取らしむるや、否や、王曰く、之を取らむと欲す、彼曰く若人あり南方、西方、北方より來る東方の如くならんに王猶之を取らむと欲するや、王曰く然り、彼曰く若し復人ありて海の一邊より來り語る所亦同しからむに王猶取らむとするか王曰く然りと、頼吒和羅曰く噫、拘獵王よ佛實に此事を見玉ひ、人の苦貪にして厭足なきを知り玉へり、是正さに佛の説き玉ふ第四事にあらずやと、乃ち進み説きて曰く。

我世間の人を見るに、財あれども痴にして施さず、財を得て復更に求む、饑貧にして物を積み聚む、王者天下を得、整御すること其力に隨ふ、海内に厭足なくして、復海外に求む、王及び諸の人民、未だ欲を離れず命盡く、髮を散じて妻子哭す、嗚呼苦は、伏し難し、被を衣せて埋藏し、或は薪火を積みて燒く、縁行はれて後世に至る、燒け終りて慧念なし、死後財隨はず、妻子及奴婢、貧富俱に共に同じ、愚智も亦復然り、智者憂を懷かず、唯恐のみ慚感を抱く、

是故に智慧勝れ、正覺を得るに違ふ、深く有に著し、愚痴にして悪行を作す、法に於て非法を行し、力を以て他を強奪す、智少くして習効多く、愚多くして悪行を作す、胎に趣きて後世に至り、數々生死を受く、既に受けて世に出生し、獨り衆の惡事を作す、賊の他に縛せらるゝが如し、自ら作せる惡に害せらるゝ、是の如く此衆生、至りて後世に到らむ、己が作る所の業の爲めに、自ら作せる惡に害せらるゝ、葉の熟して、自から墮つるが如し、老少も亦斯の如し、莊美愛樂を欲し、心好惡の色に趣く、欲の爲めに縛害せられ、慾に困りて恐怖生ず、王よ我此を見て覺る、知りぬ是れ沙門の妙なるを

王之を聞き深く感し、道を得て初果の悟りに達し、且つ五戒を受けて、嚴格なる道德を行ひ、清淨なる生活を爲した。

報 道 一 束

秋深うして空鳴きわたる雁の聲などきにつけ、げに暮れ月の初、殊の外物のあはれを感じられ候。南條博士の東洋學會に出席と、井上博士の歐米漫遊の行を壯にせん爲め送別會に催され候。新法博士の御臨場もありて頗る盛會に有之候。殊に南條、井上の兩博士は極めて有益の演説を試みられ候。食後別席にて一同卓を圍み近角、南條、池山の諸氏洋行の失策談等ありて罪なく笑ひ興じ散會致候。

伊藤農亭男十餘年來の日記を燒きしとの事新聞に見む候。誠心忍の話を却て氣樂に候。

●求道學舎の近角氏は嚴父の微痾を見舞ふか爲め、郷里に近州に歸省せられ候。

●南條博士は本月六日横濱出帆、井上博士は中旬頃なるべしとの事候。

●東京府にては來年度より畜犬税を課する由に候。犬も年貢を納め候様に相成候。

●西本願寺にては愈々滿州布政を開始することに決し、先頃露領に駐在せる谷口常之氏をハルビンに駐在せしむること致候由。

●ドクトル、イツシンデンドルフより左の書簡参り候、茲に御披露申上候。

政教時報只今拜讀致候劍虹兄の「閑文字」原稿比較論も面白く、報道一東欄に三河の健碧館に滞在の主人公は誰なるや、アカラ所も面白く、殊に表紙の色は大賛成に候。時、秋稷の時に候間、秋の色としては黄ばみたるが最も田舎人には天然界の色と相應して何となく愉快に感じ候。矢張春は緑りの新緑、夏は其濃き方、又は熱さを代表する赤色、冬は雪にならへて白か、又は寂しくドンミリしたる類が宜しかるべく候。今迄の雜誌ならべて見候に今回の色が一番宜しく存候。常盤君の「無我の福音」ふさわしき御文章とうれしなく拜讀致候。ハイカは、大にハイカラを論じ、無我は大に無我を説き、田舎の村風子は大に田舎をいふ所最も妙と存候。一寸思ひ附候まゝ、一筆如斯候。頓首。

報道子も亦一寸思ひつき候まゝ、一筆如斯候。頓首。

新刊紹介は次號にゆづる

日 曜 講 話

毎 日 曜 午
前 九 時 よ
り 開 會 す

求 道 學 舎

本 郷 森 川 一 町 番 地